

大阪・廣臺寺に於て

# 勸学和上に聞く① 聖教の眞実性と 布教伝道について

本願寺派勸学  
行信教校名誉校長

梯 實圓

このたび浄土真宗聖典の学習誌『季刊せいてん』が100号を迎えたことを記念して、これまで「浄土真宗聖典」の編纂に携わられた勸学和上に、聖教についてお話をうかがいました。

まずは本誌で「聖典セミナー歎異抄」をはじめ、多数の対談にご登場いただきました梯實圓和上に、和上のご自坊で、聖典の眞実性と布教伝道についてお話いただきました。

## ■お聖教とは

もともと「お聖教の「聖」という字は、聖智、仏のさとり智慧を表現した言葉です。だから聖教というのは、人間のつくったものではなくて、根源的には仏さまのおさとの境地から届いてきたものです。

真宗の祖師でもあります天親（世親）菩薩のお兄さんの無著菩薩が、『撰大乘論』で、「最清浄法界等流」（最も清らかな清浄なさとの領域である法界から流れ出てきたもの）と提示されています。それを天親菩薩が、「最清浄法界より流るる所の経等の教法を、（最清浄法界等流」と名づく」（天親菩薩『世親撰大乘論』玄奘訳巻三）と註釈されています。「最清浄法界等流」、それが聖教というのだといわれています。

ほんとうは悟りの境地というのは言葉を超えた世界です。いわゆる般若・無分別智の領域なんです。しかし、仏さまの言葉にならないそのさとの領域を言葉にして、人びとに言葉を超えた世界を知らせるはたらきを持っている。それを仏さまの無分別後得智といわれます。それによって世間を超出した眞実の世界を衆生に開くのです。

ところで、せっかく自他を超え、生死を超え、言葉を超えた領域に到達したものが、どうして迷いの世界に戻ってくる必要があるのか。なぜ人びとに伝えるということが出てくるのか。実はそれこそさとの必然性なのでしょう。

自他の壁をこえ、自のごとく他を見、他のごとく自を見るという自他の分別が超えられたら、人びとを他人としてでなく、自己としてみる。自分と同じものとして他者をそこに見出すわけです。さとりというのは、自他を超えると同時に、新しい自他一如の他者を見出していく。そこから無分別後得智が開けてくるのです。これがなかったら本当のさとりじゃないということです。

自他一如という一如の世界は、必ず人びとの苦しみをともに痛み、人びとの悲しみとともに悲しみ、人びとにまことの安らぎとよろこびを与えていこうとする、そういう心が必然的に出てくる、これがいわゆる慈悲なんですね。それが他者との心の交流を求めて、新しい世界を開く言葉を生み出しているのが、聖教、経典といわれるものです。それは生死を超えた聖者の無分別

後得智によってつむぎだされた智慧と慈悲に満ちた絶妙な言葉ですから、それを聞く人びとに生死を超え、自他を超えた悟りの領域を開いていきます。だから、聖智に裏付けられた聖なる典籍、それでお聖教というのでしょね。

## ■親鸞聖人の用いられた「教」

また「教」という場合、教えそのものの「教法」という場合と、それを言語化した「教説」という場合があります。

教説については、天台大師智顛が『法華玄義』に、「教とは、聖人、下に被らしむる言葉なり」と解説しています。「聖人」とは無分別智をひらいた聖者、「下」というのは凡夫ということで、無分別智をひらいた聖者が、凡夫に言葉でそれを開き表し、人びとを呼び覚ます。そういうのを教えという。だから、教えを説く主体は必然的に聖者でなければいけなくなります。だから、凡夫が説教することができるのかという問題が必然的に出てきます。

そこで、親鸞聖人が、「教」という言葉をどのように使っておられるかを見ますと、『教行信証』には、教説を次のよう

に見ておられます。

一つ目は釈迦・諸仏の教。これはお釈迦さまの説法、これはまさに經典です。十方の諸仏が勧める教はお釈迦さまの教と同格です。

二つ目は阿弥陀仏の教。阿弥陀仏が直接説法されている、お経でいえば、「今現在説法」（二二二頁）と『阿弥陀経』には説かれている。親鸞聖人は、「行文類」の六字釈で「歸命」について、「命」を「教なり」（二七〇頁）と、南無阿弥陀仏が教であると言われています。それが「歸命」は本願招喚の勅命なり（同頁）という言葉になるんです。阿弥陀仏が本願招喚の勅命として教を説かれるというものです。

それから三つ目は、祖師方の教があります。これは「正信偈」に「唯可信斯高僧説」（二〇七頁）とある七高僧の教説です。

もう一つ、これは善導大師の言葉に、「自信教人信 難中転更難 大悲伝（弘）普化 眞成報仏恩」（二六一・四二頁）とある、人を教えて信ぜしむるといって「自信教人信」の「教」です。これは、念仏行者の自信教人信というものが認められている。その人が無分別智をひらいたというわけで



はないけれども、信心という仏さまの智慧をいただき、その信心の智慧に導かれお取り次ぎをしていく。このように「教」というときはそれだけ広い範囲で使えるけれども、お聖教といわれるものは、もう少し限定をしなければなりません。

### ■浄土真宗のお聖教とは

では真宗の聖教とは何なのかというと、基本的にはやはり、親鸞聖人によって確認されたものが中心だと思えます。

親鸞聖人はたくさんの經典のなかから取捨をされている。二双四重にそうしじゆうの教判といった取捨の基準を設けて、粹組みをきちつと制定して、お聖教というものの意味づけとその存在価値をきちつと確認していかれませす。そういうことができる人がいわゆる宗祖といわれる人です。

真理を見抜く眼をもった明眼の師によって、きちつと整理し整頓される必要がある。これが非常に大事なことです。これがなされていないと、私どもでは玉石の見分けがつけられなくなってしまうんです。一つ間違えますと、どこへ連れていかれるかわからないといった危険性もある。その怖さは、

世界には段階があります。十年前に読んだときには、なんかよくわからんと読み飛ばした。三年前に読んだときには、何気なしに読み飛ばした。それをいま読んでみると、これはすごいことを言われているんだな、これはすばらしい言葉なんだなと気がつくことがあります。実はそれは自分がそれだけ成長しているわけですよ。どれだけ読めたかということは、自分がどれだけ成長したかということのバロメーターでもあるわけです。しかし、成長させたのは誰かといえばお聖教なんです。

お聖教は、必ずしもはじめから最後まできちつと読まないといけないことではない。パッとページをあけたところを今日は読もう、そういう読み方でもいい。そこで、「今日はこんなことを聞かせてもらったな」「ああこんなことを気づかせてもらったな」と世界が少しずつ広がっていく。

お聖教は、何重にも譬喩・因縁に取り巻かれていきますけれども、それを通して向こう側に、人間の知見、人間のものの考え方を突き抜けた領域があるというのを教えてくれます。だからやっぱり死ぬまでお聖教を読み続けるというのが浄土真宗の門徒

この間のオウム真理教事件で、日本人はいやというほど知っているはずなんです。特に人殺しを正当化するような經典の読み方をされたら、どうしようもないですよ。あの事件の一番の問題の根源はどこにあるのかというと、經典を見る眼がない者が指導者になっていったということでしょう。そういう意味で、經典をきちつと選定してくださる祖師の存在は非常に大事なことです。その祖師が、浄土真宗の場合は、親鸞聖人です。

そういうことで、浄土真宗のお聖教は親鸞聖人が定められたもの。これが私たちにとって直接のお聖教で、親鸞聖人が選定された「浄土三部經」、そして、七高僧のお聖教です。七高僧のもでもご開山の眼を通しているということが大事なんです。ご開山の眼を通したものと、ものすごく安心感がありますね。そして、親鸞聖人がお書きになられたもの。さらに、親鸞聖人によって育てられた、覚如上人とか、存覚上人とか、蓮如上人といったすばらしい方がたのお書きあそばしたのも、やはりお聖教に準ずるものとして大事にしなければならぬと思います。



### ■お聖教に私が読まれる

の生き方だと思えます。私たちが普通書物を読むときは、私が主人公になって書物は客体になっていきます。ところが、お聖教を拝読する上で大事なところは、自分が主人公にならずにお聖教が主人公になる。お聖教を主体として私が客体になる。私が読んで知るんじゃない、お聖教は知らせるもの、私は知らされる者としてお聖教を読む。だから私がお聖教を読むんじゃなくて、逆にお聖教に私が読まれていくということでしょうね。そういうふう

### ■お聖教から広がる世界

私が考え見ている世界は、私が描いた世界です。私は、結局自分の描いた心の世界の中で、泣いたり笑ったり怒ったりしながら一生を送っている。その外の、それも「まこと」の世界をかいま見せてくれるのがお聖教です。

お聖教というのは、私の世界をやぶっていくものだから、当然抵抗がある。お聖教とたえず格闘しながら、そして楽しみながら、何度も何度も拝読する。読んですぐにはわかるというんじゃない。われわれと全然違った世界が展開していくんですから、はじめからわかるわけじゃないですよ。

お聖教というのは面白いことに、ここまですわかったらいいというものじゃない。生涯、「ええつ、こんなこと書いてあったのか」と気づき続ける書物なんです。お聖教というと普通は教義を学ぶものだと思いますけど、それも大事なことです。お聖教に生きている人の息吹を感じ、お聖教に生きていく人の味わい方、物の見方というものをふいと気づかせてもらえます。それから、心の成長にもなって開ける

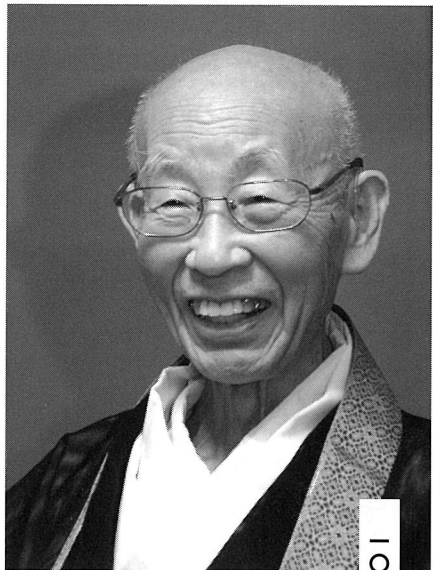
にお聖教を主人公にして、自分が読まれていく。それによってお聖教が私の中で主体化していくのです。

そうしているうちに、お聖教が言おうとしていることが少しずつわかってくる。徐々にわかってくるようになるということは、お聖教と対話のできる主体が育てられてくるということです。

特に親鸞聖人はお聖教の読み替えをドンドンやっつけていられる。あれはすごいですね。お聖教を読むことによって、お聖教の持っている智慧が聖人の中にだんだんと蓄積され、そして、その智慧によってお聖教を読み切っていくということができるようになるんです。これは聖人のような方だけができる離れ技です。うっかりしますと、とんでもない見当違いのことをやりますから。しかしご開山は「行文類」の六字釈や、「信文類」の三心釈などを見ますと、実に縦横無尽と言ってもいいくらいの読み替えを展開されます。あれはもう人間技じゃない。ただの知識の蓄積でもなく、仏さまの智慧と融合をしている人にだけ可能なことです。

(38頁に続く)





100号記念インタビュー

勸学和上に聞く①

# 聖教の眞実性と 布教伝道について

本願寺派勸学 梯 實圓

承前(5頁より)

今回のインタビューは、梯和上のご自坊での収録となりました。予定の時間を一時間も超えて聖教についてお話いただきました。引き続き、梯和上のお話をお届けいたします。

## ■どう生きるかでなく

### 「この世を超えるもの」

門徒の方が、具体的にどのようにお聖教と向き合っていくべきか、ということですが、やっぱりね、お聖教というものに対する心づもりが必要でしょうね。この世のことを言ってるんじゃないんだ、この世を超えていく道が説かれている。それだけにはつきりとお伝えしておく必要があるでしょうね。

この世の知識を蓄積したり、あるいはこの世をどううまく生きるかという方法をここに求めようとしたらまず見当違いで、あ

まり得るところはないでしょう。お聖教はこの世を超えるためのもので、そのために拝読する。生と死を突き抜け、生と死に縛られない世界を確認していくために、愛と憎しみというものを乗り越えていくために、そして、自分自身の心にだまされないうようにするために、お聖教を読むということでしょうね。

むしろは自分の心にだまされてばかりです。好きも嫌いも自分が描き出す心の影。それにだまされて一生棒に振っている。その夢みたいな人生を突き抜けて目覚めた人生を生きる、それが仏法だという、そういう覚悟をすることが大事でしょうね。

## ■正確なのが実はやさしい

どのようにお聖教の内容をやさしく表現していくか。このことも大きな問題でしょう。お浄土の問題とか、眞宗はその点で難しいですよ。そもそも、人間の思いはからいを超えた幽玄な宗教的眞理が開示されているのですから、それは言葉の難しさで

はなくて、人知を超えた世界が示されているという事柄の難しさなんです。

やさしいということは正確さがないとやさしくないんです。親鸞聖人は、『唯信鈔』や『一念多念分別事』を註釈されて『唯信鈔文意』や『一念多念文意』をお書きになっておられますが、もとの文章は、平明で口調もいいのに、聖人が、いざ筆を執られると、前人未踏の境地を開いてしまつて、解説されたもの書物よりも解説書の方が、深遠で難解であるという皮肉なことになっていきます。聖人はわかりやすく説くために、本願の世界を正確に開顕しようと努めておられるわけです。

そういう意味で、難しい論理で展開していく方が、むしろ読み手にとっては簡単だけれども、やさしく説こうとすると、読み手にとっては、かえって躓きになってしまふところが難しいところです。そういう眞宗のアイロニーみたいなものを切り開いていくのが、ほんとうの布教なのでしょう。

## ■説話で引き寄せて論理を通す

例えば、天親菩薩は『浄土論』に、「修多羅の眞実功德相に依つて 願偈を説いて

総持し、仏教と相応しよう」(七祖二九頁、意)とお説きになっていきます。すなわち、「無量寿經典」には、眞実功德である仏陀の悟りの領域を浄土・如来・菩薩の三種の莊嚴、開けば二十九種のはたらきとして説き顕されているといわれています。そして、その如来・浄土を想念する人は、五念門という生き方をするようになり、煩惱の人生を、浄土願生の道場に転換していくと説かれています。

それをさらに曇鸞大師は、実に美事に註釈されるんです。その『往生論註』では、三嚴二十九種の浄土の莊嚴が、なぜ眞実功德なのかということ、実に明解な論理と説話とで解説されていきます。その説話はほとんど中国の話です。中国の人たちは、自分たちの生活の現場のなかで法蔵菩薩の本願がはたしていることが見えてくるわけですね。お経の言葉を自分の生活のなかで実感できるように解説してみせる。一方で、性功德の積など、論理を駆使して説いていきます。そうして、実にわかりやすい説話と非常に精密な論理とをあわせながら説いていけます。

曇鸞大師にしても、善導大師にしても、

譬え話がうまいですね。そういえばお釈迦さまもそうですね。「広説衆譬(広くもろもろの譬へを説き)」(九二頁)とある『観経』ばかりでなく、「經典」はみな巧みな譬えをうまく駆使して、精密な論理に肉付けがされています。

なかなか眞似のできない難しいことですが、やさしく表現するということを考えていくと、説話や譬喩によつて、読み手との共通の土壌を作つて、伝えるべき法義を正確にお伝えするという祖師方のテクニクに学ぶことができるのではな

いかと思うんですね。それから、『季刊せいてん』は写真が好評ですが、やはり文章だけでなく、写真や挿絵といった視覚的な媒体をうまく用いて伝道するということが有効だと思えます。写真は魅力的で楽しいですから。またこれからは、電子書籍といった媒体も出てくると思いますが、ふんだんに写真などを使ったものも、若い方に研究していただいたらとも思います。世のな

かはどんどん変つていきますからね。